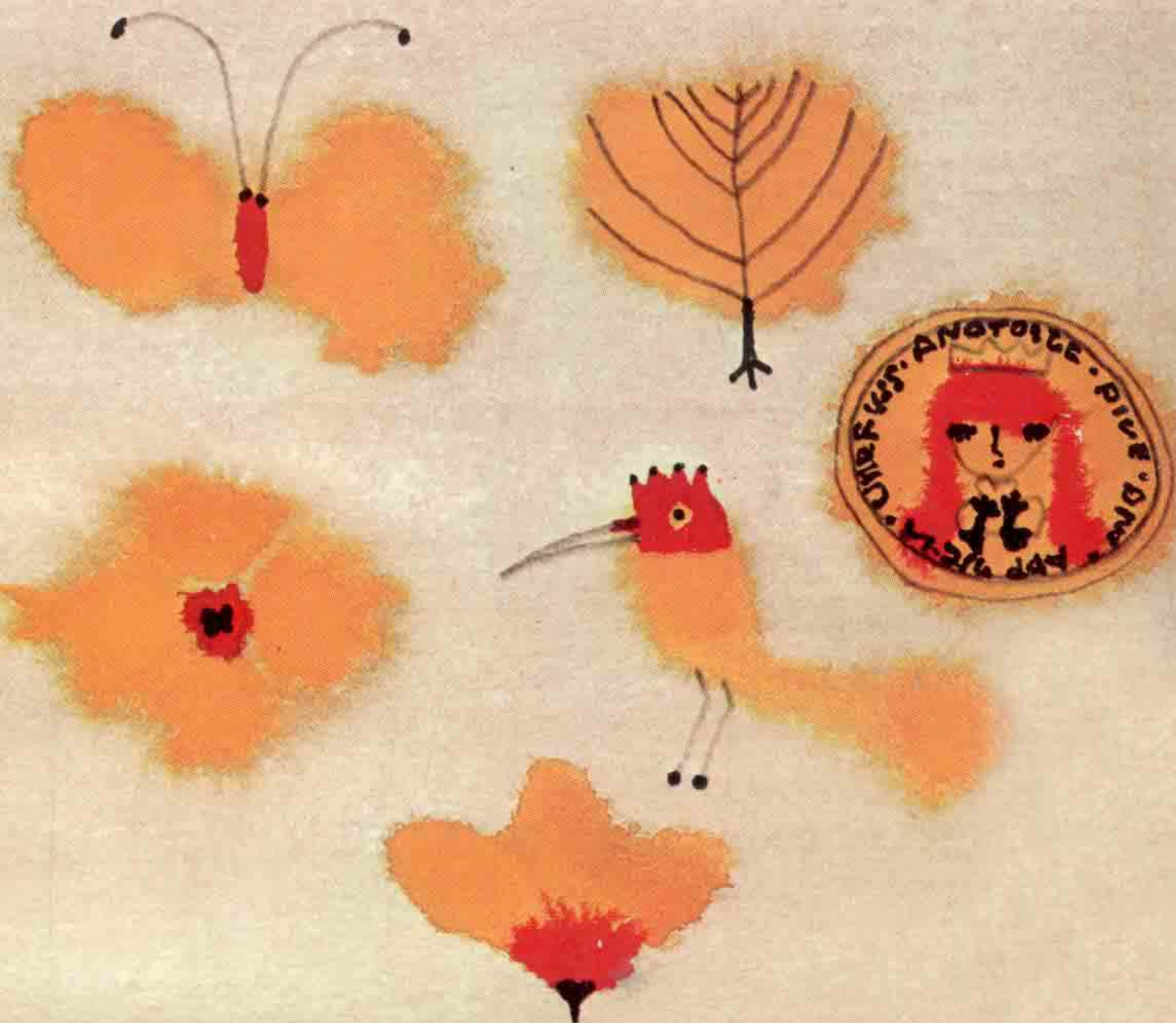


女の日時計

田辺聖子



角川文庫

おんな ひ ど けい
女の日時計

た な べ せ い こ
田辺聖子



角川文庫 2957

昭和四十七年九月三十日 初版発行
昭和五十八年四月三十日 二十六版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三
電話東京二六五―七二―一（大代表）
〒一〇二 振替東京③一九五二〇△

印刷所——新興印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-131402-0946(3)

女の日時計

田辺聖子



角川文庫 2957

乾いたくちびる

沙美子^{さみこ}は三面鏡の中にうつっている冬空があまり美しいので、化粧を終えてからも、しばらく、見惚^{みと}れた。

青い、それでいてするどくない、どこかやわらかみを湛^{たた}えた深い空の色は、阪神地方特有のものである。明るい鏡の中には、さえざえした緑の松林が、薄むらさきの六甲連山をうしろにしてつづき、母屋^{おもや}の屋根瓦^{やがわ}が木がくれに見えていた。

午後、それも夕暮れまでにはまだ少し間のありそうな、こんな時刻、奥まったこのあたりの高級住宅街には絶えて物音もない。ただ明るい光がみなぎっていて、しんとしている。

今日は早めに帰るよ、と朝の出がけに、夫の敬一が言っていたので、沙美子はいつもより早く家を片づけ、身じまいをしておきたかった。いずれ母屋から呼び出しのベルが鳴ることであろう。夕方、母屋で義妹の恵子のお見合いが行なわれるはずなので、数人の来客がある。沙美子も接待を手伝わされるに違いなかった。

今朝、玄関で敬一がひとりごとのように、

「恵子のやつ——このへんで片付いてくれたらええのになあ」

と、靴をはきながらいったが、沙美子は何もいわず、ほほえんでうなずいてみせただけだった。誰が聞いているというのでもないが、義妹のことに關して——いや、義妹だけでなく、夫の家族のことについてうっかり口を利いたら、どんなことになるか、今までの経験で、沙美子にはよくわかつているのである。

一年前に沙美子たちが結婚したとき、邸内の一角に、若夫婦のための新居が建てられた。

母屋とは離れているし、世帯は別だし、こちらの方にはお手伝いさんもないので、夫婦だけのおしゃべりは、夫の家族にはきこえないはずなのに、奇妙に筒抜けになってしまふ。さりとて、夫がいうわけではもちろんない。それなのに、

（お嬢さんは、こない思うてはるやろけど——）

（沙美子さんはこれこれなんですて、なあ）

などと、義妹たちや姑からチクチクとした口調でいわれ、沙美子はいたずらをみつけられた子供のよう、に、恐縮する、というよりはぼかんとしてしまふことがよくあった。

（何も言わへんほうが、ええのやわ——）と、この頃では沙美子は思っている。結婚してはじめての頃は、沙美子は何でも夫に一部始終を話さずにはいらなかった。今日はこんなことをお姑さまにいわれた、恵子さんに言われた、穉子さんがこういった……夫は、かなり辛抱強く聞い

ていたらしいが、だんだん、不機嫌な眉の表情になってくるのがわかった。

それでも沙美子に向かって怒るといのではない。彼には罵詈雑言のボキャブラリーがないらしく、せいぜい不快な、辛そうな、ゆううつな顔をしてみせるだけで、沈黙して、さっさと寝室へ入り眠ってしまう。

沙美子は、そんな夫が不満だったが、しだいに、夫の家族のことは口にしなくなった。

沙美子が不満や不快を口にせず、色に出さず機嫌よくしていれば、夫の敬一も愉快らしい。

敬一は三十になったばかりだが、年のわりには角がないという評判である。おだやかで、沙美子には優しい。新婚の頃から変わっていない。

沙美子は会社の番頭たちが（いや、いまは専務や部長などと鹿爪らしい名前をもらっているが、

昔風には番頭や手代の感覚である）

「大旦那さんは強うてワンマンやけど、若旦那さんはおっとりしてはるな、ほんまに、ぼんぼんいうとこや」と噂しているのを知っている。

皮肉やいやみを言ったこともなく、ウソをついたこともなく――まじめでまっとうで――いか

にも、二百年つづいた造り酒屋の若旦那という風格で、おうようだった。

（敬一さんがええ人やさかい、あんたも辛抱せな、あきません）

と実家の母に言われてから沙美子は、自分の中のどろどろしたみにくい憤懣や、負けん気や、

反撥を、生のまま夫にぶつつけるのは、ひかえるようにした。ぶつつけたところで、夫が苦しむだけで、ひいては自分も不快になるだけだと悟るのに、一年かかった。

母屋は大家族である。

舅しゅうとと姑しゅうと、義弟の章二。義妹の恵子、毬子の二人はまだ、それぞれ二十四と二十二で、嫁入り前だから家にいるのは当然だが、結婚して近くに片付いている珠子たまこという、敬一のすぐ上の姉が、子供連れでたえず家に入り浸っている。

母屋と離れの連絡にはベルがあつて、姑のせつは沙美子を呼ぶときはベルを鳴らす。

そのたびに沙美子は取るものも取りあえず、という恰好かつこうで走ってゆかねばならない。これはお手伝いさんの部屋にあるのと同じベルであつた。

——親類の誰さんが見えてますからご挨拶あいさつを……。

——珠子が買い物にいくそうだから、子供たちを見てやってちょうだい。

ことごとにつけて呼ばれるので、実質上は同じ屋根の下に住むのとかわりはないのであつた。いや、それ以上に気疲れしてゆううつである。

——沙美子さんは、ええお家へ嫁いかはった。

結婚のときに親戚しんせきの誰かれに満足そうにいわれたが、沙美子はこの頃では、心の中で、

(いつでも、かわったげますわよ)

とおどけて舌を出している。

いや、はじめの頃から、権高なこの婚家には抵抗を感じるものがあつた。

酒銘「初桜」、二百年つづいた造り酒屋の榊原家の若夫人として、沙美子は迎えられたわけであるが、沙美子のつもりでは、敬一という一人の青年と結婚したはずなのが、いつか、いやおうなく、敬一もろとも、ガチッと「旧家」の重圧のなかに組みこまれてしまっている。（ええおうちへいかはった）というようなものではなかった。

榊原家は夙川しゅくがわの山手の、奥まった町にある。

坂の上の一画に、城のような石垣いしがきをめぐらし、カイヅカの深い緑の植え込みがその上に繁しげつて、長々とつづく。垣の下は小川になり、山からの清水が流れていて、城の濠ほりのように生け垣の緑をうつつしている。

松、樟かきなどの植え込みの向こうに、建ってから百年以上という古めかしい母屋があり、威丈高いたけだかな大門はびたりと閉ざされ、新年とか、冠婚葬祭の時でないといひらかれない。

その代わりに、最近、車が入りできるように作られた鉄柵てつさくの門が横手にある。そこから白い砂利道がS字形につづいて、築山をめぐる豪壮な玄関へとみちびいてゆく。中世の要塞ようさいのような、城館といった方がふさわしい邸宅である。

沙美子の実家は、船場の呉服問屋だった店も、その住居も、戦災で焼失して、それからの建物だから、ずっと新しいものだった。

小さくはないが、ここの婚家ほどぎょうぎょうしくくない。それにふんだんに光の入る明るい洋

館で、芝生の庭も親しみやすく、両親も兄妹もにぎやか好きだった。来客が多く、それも家族たちの楽しみの一つで、たのしい雰囲気だったと思っている。店は船場に再建したが、住居は大阪市の南はずれにうつして、あたりにはすぐ下町がつづいていたから、そのせいもあったのだろう。つくろわない町の気風がそのまま、家の中へもはいりこんでいるようだった。

しかし、この榑原家はちがう。戦災を受けていないということは、特異な気風を昔ながらに伝える温床になるのだった。町そのものが、戦争も知らず時代のうつり変わりも知らず、何十年かわることなく大邸宅がひっそりと並んでいるのである。昼間でも死のように静まり返った町。

もうこれ以上、手入れするところがなくて、どこもかしこも、出来上がったものを守ってゆくだけのとりすました美しい町だった。沙美子は実家の感じとくらべてみて、何かもうひとつ、婚家の物々しいたたずまいになじめないのはそのせいである。

母屋で暮らしていないせいか、榑原家のヨメという気はまだ切実に感じられないのであった。鉄柵の門に入って車が砂利道を右へとり、離れの小さな洋館の前にとまると、ホッとする。間借り嫁、とでもいうのかもしれない。

しかし沙美子は、このあたりの自然と静寂は好きであった。どうかすると駅前マーケットのスピーカーから風につれて流行歌のきこえる、実家とちがって、ひねもす、しんと静まりかえった奥ふかい町。風の肌ざわり、樹々の匂い。桜の花と樹々の緑が市松模様で町を染めあげてくる春。松の花粉が風に流れて来たり、蟬しぐれが降るようだったり、燃えるように紅葉する樹が垣の内

から梢^{こやえ}をのぞかせていたり、四季折り折りに美しい自然を、沙美子はもう、一年見て過ごしたわけである。たまに実家に帰って、（ゆっくりしてきなさい）と敬一に許されても、二晩と泊まったことはなかった。

（お姑さんに気がねするのやろ）

実家の母はふびんそうにいうのであるが、沙美子は、やはりそそくさと、「取りすました」よそよそしい町にかえってくる。抵抗を感じながらも婚家の大きな花崗岩^{かこうがん}の石垣の内の人になると、何かしらホッとするという、矛盾した気持ちになる。それはもしかしたら、やはり夫への愛のひとつかもしれない。

町の美しさも、自然や風光のめでたさも、敬一というやさしい夫のそばにいて、はじめて身に沁^しみる情緒になって感じられるのであろう。煩^{わづら}わしい家族関係の中で、二十四の若い沙美子がなんとなく一年を過ごして来られたのも、敬一がいればこそかもしれない。

みちたりたような、物うい気持ちで沙美子が鏡台を離れると、車の音がした。二階のこの部屋からは、邸^{やしき}につづく坂道が目の下にみえる。車が一台、のぼってくる。夫の運転する古ぼけたオイルズモビルではない。まだ、ま新しい国産車で、クロームの部分がいやに光ってみえる。新品の車体は軽そうで、羽根^はが生えてとぶように走り、そのまま門へはいると急ブレーキで、右脇^{みぎわき}の車だまりへとまった——いや、止まるつもりじゃなかった。タイヤが横すべりしてきしみ、車体はしゃっくりしたように、ぶるんと揺れて、花壇をふち取る煉瓦^{れんが}の垣にすこしばかり、のしあげた。

（まあ、乱暴な運転やわ……）

レースのカーテンをしぼって見おろしている沙美子のすぐ真下へ、車から青年が下りて来た。痩せた長身の青年で、ぱたんと、車のドアを無造作に閉めると、沙美子の離れのほうへ通ずる小径を大股に歩いてくる。

ゆるやかな勾配がついている坂道の両脇は花壇であるが、だいぶ小輪になったコスモスの群落が風にゆらいでいる。青年はそれに目をあてながら、いそぐでもないが軽快な足どりでこちらへ進んでくるのであった。

二

沙美子がドアをあけると、青年がベルに手をのぼそうとしたのと同時だった。

「こんにちは」

青年は濃い眉の下ひとみの瞳に、なぶるような好奇心をちらと見せて、いった。微笑を浮かべた口辺が、若々しい感じである。

「早く来すぎたかな、僕——」

「どなたさまですか？」

「相沢です。伯父おじたちはまだですか？」

「相沢さま……？」

「失礼ですが、あなた、恵子さんでしよう？　じつにいいな、こんな風にばつと会うのは——これじゃ、見合いじゃなくて、出会いですな。ハッハハ」

「あっ」といったきり、沙美子はすんなりした指を唇くちびるにあてて、これも笑い出してしまった。青年の率直な快活さが伝染したように、笑いがしばらくとまらない。

（えらい、オッチョコチョイの人やわ——）

と思いながら、まさかそうもいえないので、

「いいえ……ちがいますわ……そんな……」

笑いで言葉がとぎれてしまった。青年は、

「ああ、いい笑いかたをする人だな。よく笑う人、僕は好きだな」

沙美子はあわてて、笑いをこらえた。

「あの、ちがいますの。あたくしは姉ですよ、恵子さんの……つまり、兄嫁ってわけ」
「え？」

「あの、恵子さんたちは、あちらの母屋のほうでお待ちしております」

「こちらは、それじゃ……」

「主人とわたくしどもの住居になっていますの」

「失礼しました」

青年はさすがに、少し度を失ったていだった。

「僕、出先から直接、来たものですから、よくたしかめないうで、それはどうも——」

「いえ、よく母屋とおまちがいのようになっていらっしゃるお客さまも多いんですよ」

「じゃ、僕、向こうのほうへ……」

「ご案内いたしますわ」

沙美子のはきものをかえて、先に外へ出た。

「あんまりだだっ広すぎるな……」

青年は率直な態度で、邸内を見廻しながら、

「この中で万国博でもできそうですな」

沙美子はまた、笑い出さずには、いられなかった。人を笑わせるというより、あんまり率直にずばりとものをいうので、こちらの笑いを誘われるというのだろうか。（飾りけのない人らしいわ）と、沙美子は青年に好感をもった。

「きれいな色ですね」

青年は、沙美子と並ぶと、話をかえた。

「ええ——。でも、もうだいぶん枯れはじめて」

沙美子がコスモスを見ながらいうと、

「いや。あなたの服ですよ」

「は？」

「レモンイエローがよく似合う……明るいいい色ですね。あなたによく似合う」

「まあ」

青年は沙美子を顧みて微笑した。

沙美子はそのなになにに率直に、ほめられたことも、そんなにぶしつけにまじまじと見つめて微笑されたこともなかった。彼の眼には暖かな親愛感があるだけで、無礼なからかいは感じられなかったけれども、沙美子はどぎまぎした。

（よっぽどいい人か、それともよっぽど女たらしの自信家か、どっちかやわ）

沙美子は少し顔をひきしめて、歩みを早めた。青年は屈託なく、ついてくる。母屋の玄関からあがると、沙美子は工合よく、姑のせつとあえた。

「おかあさま、相沢さんがいらっしゃいました。おひとりでおさきに……」

「えっ」姑はあわてふためいて太ったからだをゆるするようにして、衝突のかげをのぞきながら小声になった。

「まあ、もう！ どないしようかしらん、こんなに早う……本人さんが？」

「ええ、応接間へお通ししましょうか」

「奥の日本間の方へ、ご案内してちょうだい、そして、沙美子さん、あんたちとお相手しておくれやすか」

姑は改めて身を引いて沙美子の身なりをみながら、眉をひそめた。

「ま、えらいそんな失礼ななりで……ふだん着やないの、早う着更えすましたらよろしいのに」

「すみません……恵子さん、用意してはりますのん？」

「えらいこっちゃ、まだ美容院から帰れしまへんのどっせ。毬子に迎えに行かそかしらん」
京都の、これも古い酒屋から嫁入ったという姑は京都弁が折り折り出る。

「沙美子さん、電話しとくれやすか、美容院に……」

「はい」

「ああ、いそがし、いそがし。敬一はまだ帰れへんのどすか」

「はあ、今日は早めに、いうてはりましたけど」

「お父さんもまだやし、困りますなあ。それにしても、本人さん先に来やはるなんて、けったいやな。きちんとしてもらわな、段取り悪うてかなえしまへんがな」

沙美子は、青年がさっき、離れの方へやってきたばかりか、沙美子を恵子とまちがってなれなれしい挨拶をしたことなど、姑が聞いたらどれほど「けったいな」とおどろくだろうかと、おかしくなった。

のそのそと、靴をぬいであがって来た青年を、長い廊下を案内して日本間へみちびく。百何十年間、拭ききよめられた廊下は鏡のように光ってチリ一つなく、ひんやりと冷たい。

「殿中松の廊下、というところですね」

と青年はまた、沙美子にささやいて、笑わせてしまう。青年の目くばせが共犯者のような感じで、沙美子はすましていようと思ひながら、つい、笑ってしまふ。

日本間は十帖で、池と築山のある中庭に面している。すがすがしく掃ききよめられ、ガスストーブがついていて、ほどよく暖まっていた。ガラス障子の新しいのがはいつているので明るい。沙美子は青年を座らせた。

年かさのお手伝いのお松さんが、昆布茶を捧げてはいって来る。続いて姑が着更えしてやって来た。

「まあ、これはようこそお越し……このたびはまあ……」

沙美子は姑のにぎやかな声にかくれるようにして、目立たず、入れかわりに座敷をすべり出た。それきり、青年とは口を利くひまもない。

三

座はにぎやかに弾んでいて、いっぱいの人なので、料理が出てからは沙美子は座らないで、もっぱらお松さんといっしょに接待の方にまわった。

あれからいそいで、濃い暗紅色のお召の着物に着更えて中年のお手伝いさんのお君さんに帯を結んでもらった。帯は白地に牡丹の花を織り出してあるのだが、締めて座敷へ出てみると、恵子の帯もよく似ていたので、しまった、と沙美子は思い、そのせいもあって、なるべく客側の目に